

リレーエッセイ 704

## 続・時間の風景

真冬二月の日曜日の午後、数年ぶりに近くの砧公園へ散歩に出かけた。そこは東南が東名高速と環状八号線、北西は大蔵に囲まれた丘陵地帯で、世田谷区民の憩いの場所だ。寒い冬は運動不足になる。暖かい室内でぬくぬくとくつろいでいると、外の新鮮な空気が恋しくなる。子供の頃は半ズボンのまま寒さもわずれ、陽が落ちて心配した母親が探しに来るまで、向かいのヒロちゃんとずっと遊んでいた。そんな日曜の夕方は懐かしく、昨秋以来ジョギングしていなかった身体は春を待ち望んでいるかのようだった。

**昔**はゴルフ場であったこの公園は、坂あり谷あり、旧フェアウエイの運動場は広く、すべての年代の人を魅了する。ゆっくりと歩く初老の夫婦、長年のパートナーを亡くしたのであろうか寂しそうなシニアもいる。禁止されている犬の放し飼いをする若夫婦、もくもくとウエイトを握って走るビジネスマン風男子、そして子供とサッカーやキャッチボールに興じる

スポーツパパ。どれも十数年前か、いや数年先の自分の姿と重なってしまう。

月10回を超える当直明けの疲れた体に鞭打って、わが子に腕を引っ張られ、一家四人で何度も遊びに来ては夕方の冷たい風に指先が

あの頃のじゃじゃ馬娘は第一子を出産の予定だし、医師の道を進む愚息もやっと最良の伴侶に巡り合い、結納を交わしたばかりだ。もう一度、家族皆で来たいとどんなに想っても、もうあの頃のボールを追いかける無邪気な子供たちの顔をこの公園で見ることはいできない。何か人生の儚さを感じ、同時に幼い子供たちにとって親として合格してい

っていた木々の葉は落ち、枯葉は風に吹かれて冬の上をこれが最後とばかりにくるくると舞っている。シャカシャカと足で音をたてながら枯葉をかき分け散歩をしていると、秋のどんよりした雲の下エッフェル塔を望むモンテーニュ通りがふと思い出された。

**最**近、長い人生の中で人間の絶頂期は恐らく数年ではないだろうか、実際

二人は果たしてどんな学生時代を送り、どんな絶頂期を過ごしてきたのだろうか。絶頂期が十数年も続く人はごく僅かだろう。我々医師や臨床家であっても、それほど長く続けることはできないのではないだろうか。人生最良の時間、最良の日、そして最良の年はいつ来るのか。それは現在進行形で実感できるものなのか、前もって予測できるものなのか、準備はできるものなのか。知らないうちに通り過ぎてしまっただけから、「あれが絶頂期だったのか」と後悔しないためには一体何ができるのだろうか。答えは出ない。

**ひ**とつの道を走り続けてきた今、ふと思う。誰もが一度は絶頂期を実感できる、そんな幸運な人生に巡り合えるよう若い後輩の指導に尽力したい。輝かしい時間を少しでも長く保つために何をすべきか、どんな絶頂期を迎えたいのか。医師として、親として、そして臨床家、研究者として、それぞれ異なった立場での絶頂期がきっと来るのだから。

大学人として、エキスパートとして、そして祖父として、来るべき次の絶頂期に向けて新たな一歩を踏み出そう。

## 人生の絶頂期とは

東邦大学医療センター小児科教授 佐地 勉



凍りそうになるまで遊んだことが思い出される。その子供たちは成長し、母となり夫となった今、自責の念がよぎる。もっと沢山の日曜日、いやできることなら平日夕方にも子供たちとこの芝生の丘に来てみたかったと。



冬の砧公園

たのだろうかと思ったりもする。

**こ**の場所に来るといつも様々な人生のステージが目に見え込んでくる。今輝いているこの子供たち、そして大人たちは絶頂期なのだろうか。人間はいずれ静かな森の中に住みたいと

願って絶頂期を頑張っているのだろうか。自分自身、子供たちと来ていたあの頃はこの公園の明るい部分しか見えなかった。しかし今日を向けてみれば、生い茂

には概ね三年ぐらいではないかと感じるようになった。大学受験の時までに絶頂期を迎えてしまう早期型、また定年後に初めて絶頂期を迎える晩期型の人もある。30歳になってやっと横綱になる力士、40歳を超えてやっと受賞にありつく作家もいる。多くは壮年期、つまり社会で猛々しく生きている時期こそが人生の絶頂期であると思込んでいる人が多いのではないか。そんな中、一昨年は小中学校の先輩と高校の先輩が、二人同時に65歳を超えてノーベル物理学賞を受賞した。お